

## 研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-141	A-133	22-087	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>			
Alcohol use in adolescence as a risk factor for overdose in the 1986 Northern Finland Birth Cohort Study 1986 年北フィンランド出生コホートにおける過剰摂取の危険因子としての青年期のアルコール使用			
<b>執筆者</b>			
Koivisto MK, Miettunen J, Levola J, Mustonen A, Alakokkare AE, Salom CL, Niemelä S.			
<b>掲載誌</b>			
Eur J Public Health. 2022 Oct 3;32(5):753-759. doi: 10.1093/eurpub/ckac099.			
<b>キーワード</b>			<b>PMID</b>
出生コホート、コホート研究、若年、アルコール中毒、薬物の過剰摂取			35972451
<b>要旨</b>			
<p><b>背景：</b> アルコールや薬物の過剰摂取や中毒は、若年成人の最も一般的な死因の一つである。青年期の問題飲酒は、若年成人期の精神医学的疾患の罹患や自殺企図リスクの上昇と関連している。しかし、青年期のアルコール摂取が、その後の人生におけるアルコールおよび/または薬物の過剰摂取の危険因子となるかといった知見は限られている。</p> <p><b>方法：</b> 青年期から成人期早期まで追跡した Northern Finland Birth Cohort 1986 研究のデータを用いて、青年期のアルコール摂取とその後のアルコールまたは薬物の過剰摂取との関連を評価した。予測因子として、酔い（酩酊）を経験した年齢、自己報告によるアルコール耐性、思春期におけるアルコール酩酊の頻度を用いた。ICD-10 コード化された過量服薬診断情報は、全国登録から得た。違法薬物の使用または薬の誤用、Youth Self Report の総得点、家族構成、思春期における母親の学歴を共変量として用いた。</p> <p><b>結果：</b> 多変量解析において、初回酩酊年齢 [ハザード比 (HR) : 4.5、95%信頼区間 (CI) 2.2-9.2、<math>P &lt; 0.001</math>]、アルコール耐性 (HR : 3.1、95%CI 1.6-6.0、<math>P = 0.001</math>)、アルコール酩酊頻度 (HR : 1.9、95%CI 1.0-3.4、<math>P = 0.035</math>) は、アルコールまたは薬物の過剰摂取と関連していた。初回酩酊年齢 (HR : 5.2、95%CI 1.9-14.7、<math>P = 0.002</math>) とアルコール耐性 (HR : 4.4、95%CI 1.7-11.5、<math>P = 0.002</math>) は意図的な過剰摂取とも関連していた。</p> <p><b>結論：</b> 青年期のアルコール摂取は、その後の人生におけるアルコールまたは薬物過剰摂取のリスク上昇と関連していた。初回酩酊を経験した年齢が早いこと、高いアルコール耐性、頻繁なアルコール酩酊は過剰摂取の予測因子であった。</p>			